

9月1日 偽善と偽悪

先日の始業式で「偽善」と「偽悪」の話をした。なぜか偽善者を非難する風潮があるが、偽善者を自認している人間は自分の悪を認めているということ。この点において自分を善人だと思い込んでいる偽悪者の方がたちが悪い。何もせずに批判するのは簡単。批判されても善を施すことに意味がある、そんな話だった。

その日の昼過ぎだったか。国語科の池田先生が「国語表現の授業で『偽善』をテーマに作文を書かせたので見てください」といって冊子をくださった。「みんないい文章を書いています」。なるほど、みんな偽善という言葉に違和感をもったり、実際につらい思いをしたり。自分事と捉えて思いを綴っている。いい文章がたくさんあった。

スーパーボランティアとして有名になった尾畠さんは、「かけた情は水に流せ、受けた恩は石に刻め」、「人に、世の中に、恩返ししたい」とおっしゃる。全くの無報酬でボランティアに励む彼の姿を見て、偽善者だと批判する人がいるだろうか。

確かに善人ぶって何かを企てるような腹黒い輩もいるだろう。けれども多くの人が「人の為になるなら」と募金やボランティアに参加する。文字通り、「人」の「為」に「善」を行おうとしている。その善行を批判することに何の意味があろう。純粹に人の為にと思ってとった行動を「偽善者」と揶揄されることで、人はどれほど傷つくか。何もしないで批判ばかりする不毛にもう気づいても良い頃だと思う。

批判する人間は、それができない自分がもどかしいだけなのかもしれない。

